

---

# 父さんが家出した。

紀織繭璃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

父さんが家出した。

### 【Nコード】

N5639I

### 【作者名】

紀織繭璃

### 【あらすじ】

近所からおしどり夫婦として有名な藤悠輔と柚子を親に持つ、藤旭曰。

ある日、旭曰が自分の部屋で本を読んでいると、両親の部屋から怒鳴り声が…。

「俺はこの家を出て行く！！！！！！」

いきなりそう言って車で走り去った父親。

「旭曰…。もう、あの人のことは忘れなさい…」

家出の理由を話そうとしない母親。

そして、いきなり家に居候し始めた謎の男性、浮草真也。

「柚子は俺の大切な人だよ？」

それって、浮気…なのか！？

「藤、俺…お前のことが…」

しかもクラス一のイケメン男子、山田遼と急接近…ッ！？

父親は帰ってくるのか！？こじれた家族の関係は直るのか！？母と

謎の男の関係は一体なんなのか！？家出の真相とは！？

いつもハイテンションな作者が今回はなぜかシリアスだぞ！なんだ

がよく分からないカゾクの物語、ここに誕生！！！！！！

## プロローグ

時刻午後4時28分。

「ふう……」

私はベッドに横になりながら友達の秋那に借りた「アクマ先生小十郎・『事件はここで起きているんじゃない、現場で起きているんだああああああああZ……』」というなんともハイテンションな題の文庫本を読んでいた。……秋那が面白いつて言うから貸してもらったのに……。なんだかよく分からない本だ……。アクマ先生・小十郎つて……。何？天使なの！？どっちだよ！！アクマじゃな……。え？今度はアクマになった！？……もう何が何だか分かんなくなってきた……。でも結構面白いじゃない。続編も借りちゃおうかな……。

私は上半身を起こしてテーブルにあるマグカップに手を伸ばす。

「……っ……届かな……っ……！」  
バシャツツ……

「……あーあ……」

マグカップの中に半分以上入っていたココアがフローリングの床にこぼれた。もったいないなあ、全く。何してんだよ。

慌ててティッシュの箱を持ってきてココアを拭きとる。また台所に行つてココアを入れて二階に上がつてこないといけないと考えると、面倒くさくなってくる。……もうココアは諦めよう。茶色く染まったティッシュの山をゴミ箱に片付けて私は立ち上がった。

ちよつと図書館まで行つて来ようかな。図書館で……確か6時までやってたよな……？？

その時だった。

「……まえとは合わないつて思つてたんだよ！俺はこの家を出て行く……！！！！！」

ガチャン!!!!!!!!!!

乱暴にドアを閉める音が聞える。…隣の部屋…両親の部屋からだ。この声は、お父さん……？…ちよつと待て。『家を出て行く』ってどういうこと……？？？

私の思考は停止し、立ち尽くした。頭の中でお父さんの怒号と「家を出て行く」という言葉と、いろいろな物がぐるぐる渦巻いていた。…なんで？どうして？どうして、出て行くの？どうして？？階段を下っていく音と、玄関のドアをガチャンと閉める音がいつもより大きく聞える。それはまるで、行動で『もう二度とこの家には帰ってこない』とお父さん言っているようで。

私の金縛りが解けたのは、車のエンジンがかかる音が聞えたから。慌てて窓に駆け寄って、家の入り口を見ている。すると、お父さんが「家族で出かける様に奮発して買った」と笑顔で言っただけで、いた白い乗用車がスピードを上げて家の前を走り去るのが見えた。お父さんの乗った車を見送った私は力が抜けて、へなへなと冷たい床に座り込んだ。そして、だんだん視界がぼやけてきた。胸の中で、一つの疑問が浮かび上がる。

…どうして？昨日まであんなに仲が良かったのに。

…どうして、どうして、どうして、どうして……

これをきっかけに、一週間の私たち家族の戦いが、始まった。

## 家出1日目。…その一

11月9日月曜日。時刻午前7時39分。

…昨日は凄まじかった。

お母さんはあれつきり自分の部屋から出てこない。…引きこもった。だから私が夕飯を作って部屋に持って行ってあげたら、

『来ないで!』

と言われた。…私はあなたの代わりに夕飯作っただけで、言いなくなつた。でも、お母さんを責める気にはなれなかった。…その声は、明らかに泣いていた。何があつたのかは知らないけど、いつも笑っているお母さんがこんなに落ち込むなんて、今まで生きてきた16年間で一度も無い。…相当シヨックだっただろう。

私は部屋の前に作つた夕飯を置いて、

『早くしないと冷めて不味くなるよ』

と言って台所へ戻つた。そして一人で夕飯を食べた。

いつもなら、ここにお父さんとお母さんがいる。3人で笑って食事を取る。色々変な話をして、笑って『また明日、』と言って眠りにつく。…なのに。一人。家族の温かさや、ありがたさが恋しくなる。でも、…もう二度と会えないかもしれない。

『…お父さん…っ…』

そう思うと泣けてきた。

昨日はそのまま寝た。…泣きながら、寝た。

お父さんは帰ってこなかった。お父さん用に作っておいた夕食も無駄になってしまった。だから朝食はそれを食べた。…冷たくて、不味かった。それは一人だったからかもしれないけど、とにかく不味かった。またお父さんのことが出てきて、熱いものが込みあがってきたけど、今泣いたら、学校で冷やかされる。だから、必死にこらえた。

お母さんがこもっている部屋の前には昨日の夕食がそのまま残っていた。

「食べなかったんだ、お母さん」

いい大人が、何してるんだ。部屋にこもって、泣きまくって。何もせずに毎日現実から逃げて。…バツカみたい。…泣きたいのは、あなただけじゃないんだ。

私は閉ざされたドアを睨みつけて、玄関へ向かった。…学校に行かなくちゃ。

この陰気くさい家から逃げ出したかった。とりあえず気分を少しでも晴らしたかった。

「行って来ます」

革靴を履いて、お母さんに声をかける。いつもここで

『行ってらっしゃい。あまり遅くならないでね』

とお母さんが言ってくれる。でも今日は何も返ってこない。…すごく変な気分だった。

今日、お父さんが帰ってくることを願いながら、この空気がどうにかなることを願いながら、私は家を出た。…早峰<sup>はやみね</sup>学園へと向かって。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5639i/>

---

父さんが家出した。

2010年10月11日18時18分発行